第２章　井野長割遺跡の概要

１．位置と立地環境

遺跡は、佐倉市の北西部、八千代市と接する志津地区にある。本地区は京成線沿線に住宅や商業施設が密集しており、国道 296 号線と都市計画道路勝田台長熊線（通称「水道道路」）の２つの幹線道が京成線に並行している。

本地区の人口は平成 24 年 12 月末で 75,490 人と全人口の約 43%を占め、市内でもっとも人口が多い地区である。遺跡は、本地区にある京成線志津駅とユーカリが丘駅からそれぞれ約 1.5 km、約 1.2 km北に位置する。また、京成ユーカリが丘駅に接続する新都市交通システム（ユーカリが丘線）井野駅からは 300m南の位置にある。

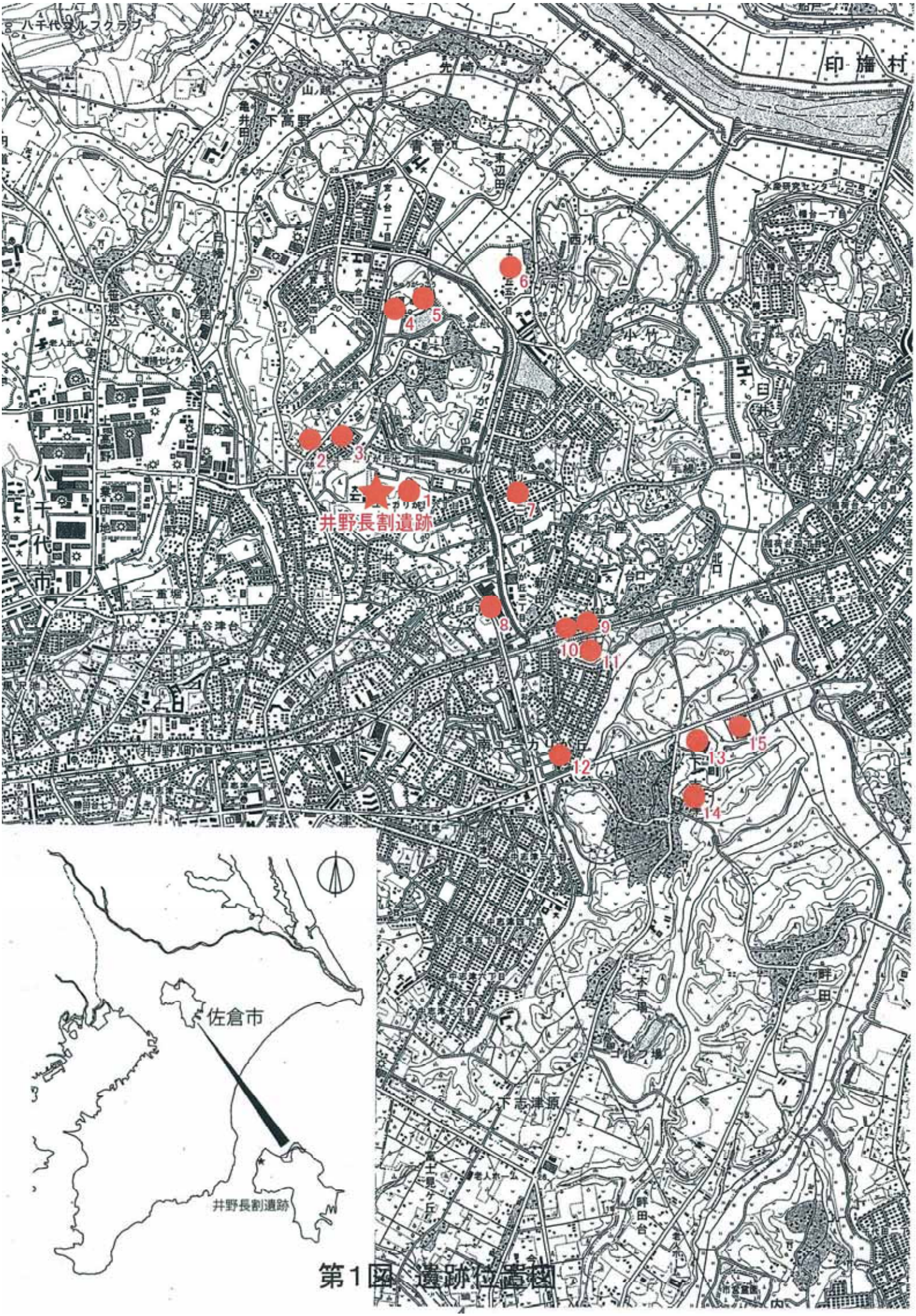
遺跡周辺は土地区画整理事業によって大きく変貌を遂げ、今後も都心への利便性から人口増加が見込まれている。

遺跡近景航空写真（平成１９年）

（中央の建物が井野小学校、その右横の木立が史跡範囲）

２．周辺の遺跡

印旛沼南岸域には、本遺跡を含む縄文時代後・晩期の中心的な遺跡が半径５km内に密に分布している。とくに、印旛沼に注ぐ手繰川と鹿島川の流域では、それらの遺跡が相互に１～４kmの距離をおいて分布している。本遺跡が所在する志津地区では、昭和 50 年代に宅地造成による発掘調査を端緒に、平成 10 年代には土地区画整理事業によって広範囲に及ぶ発掘調査が行われ、弥生時代から奈良・平安時代の集落や中世城郭といった様々な時代の遺跡の内容が明らかになってきた（第１図・表１）。



第1図　遺跡位置図

表１　周辺遺跡一覧表

地図番号	遺跡名	調査年	調査機関	検出遺構等	文献
1	井野安坂山遺跡	平成13年（2001）・平成15年（2003）	印旛郡市文化財センター	旧石器時代石器集中地点２か所、縄文時代中期土坑２基、奈良・平安時代住居跡２軒、中・近世溝４条、土坑５基、時期不明土坑34基、ピット16基	井野安坂山遺跡・井野長割遺跡（第９次）・井野城跡・井野宮ノ台遺跡・井野外山遺跡
2	井野外山遺跡	平成13年（2001）	印旛郡市文化財センター	中・近世溝２条、時期不明土坑１基	井野安坂山遺跡・井野長割遺跡（第９次）・井野城跡・井野宮ノ台遺跡・井野外山遺跡
3	井野遺跡	昭和50年（1975）・昭和51年（1976）	志津西ノ台遺跡調査団	時期不明溝４条　陶磁器（近世以降）	佐倉市埋蔵文化財報告(2)—志津西ノ台遺跡—
4	井野城跡	平成13年（2001）・平成15年（2003）	印旛郡市文化財センター	奈良・平安時代住居跡７軒、掘立柱建物跡５棟、中世台地整形区画５か所、地下式坑13基、竪穴区画７か所、井戸状遺構３基、通路・溝状遺構19条、土塁状遺構３条、土坑274基	井野安坂山遺跡・井野長割遺跡（第９次）・井野城跡・井野宮ノ台遺跡・井野外山遺跡
5	井野宮ノ台遺跡	平成13年（2001）・平成15年（2003）	印旛郡市文化財センター	奈良・平安時代土坑２基	井野安坂山遺跡・井野長割遺跡（第９次）・井野城跡・井野宮ノ台遺跡・井野外山遺跡
6	西ノ台遺跡	昭和50年（1975）	志津西ノ台遺跡調査団	弥生時代後期住居跡８軒、古墳時代住居跡５軒、奈良・平安時代住居跡６軒、時期不明住居跡２軒、時期不明方形周溝墓１基	佐倉市埋蔵文化財報告(2)—志津西ノ台遺跡—
7	萱橋遺跡	昭和50年（1975）	志津西ノ台遺跡調査団	弥生時代後期住居跡18軒、時期不明方形周溝墓３基	佐倉市埋蔵文化財報告(2)—志津西ノ台遺跡—
8	上座遺跡	昭和51年（1976）	志津西ノ台遺跡調査団	遺構なし　縄文土器（中期・後期）	佐倉市埋蔵文化財報告(2)—志津西ノ台遺跡—
9	上座貝塚（Ａ地区）	昭和24年（1949）	明治大学考古学研究室	縄文時代早期住居跡２軒、炉穴７基昭和57年県指定文化財	駿台史学第９号
10	上座貝塚（Ｂ地区）	昭和61年（1986）	佐倉市教育委員会	縄文時代早期土坑１基、炉穴２基、時期不明土坑１基、奈良時代住居跡１軒	昭和61年度佐倉市埋蔵文化財緊急調査報告
11	上座壱番原遺跡	平成４年（1992）	印旛郡市文化財センター	縄文時代早期炉穴４基、奈良時代住居跡１軒	佐倉市上座壱番原遺跡発掘調査報告書
12	上座矢橋遺跡	昭和60年（1985）	印旛郡市文化財センター	弥生時代終末～古墳時代前期住居跡26軒、古墳時代後期住居跡３軒・製鉄工房址１軒	第２ユーカリが丘宅地造成地内埋蔵文化財調査報告書
13	神楽場遺跡	昭和63年（1988）	印旛郡市文化財センター	旧石器時代石器、縄文時代中期土坑２基、古墳時代方形周溝墓２基、近世以降溝15条	神楽場遺跡・五反目遺跡
14	下志津五反目遺跡	昭和63年（1988）・平成元年（1989）	印旛郡市文化財センター	縄文時代中期住居跡２軒、土坑２基、後期住居跡４軒、古墳時代住居跡３軒・土坑２基、奈良時代住居跡１軒、歴史時代時期不明住居跡１軒、近世以降溝５条	
15	飯郷作遺跡	昭和51年（1976）・昭和52年（1977）	千葉県文化財センター	縄文時代早期炉穴１基、弥生時代後期住居跡41軒、古墳時代前期住居跡46軒・前方後方墳２基・方墳２基・方形周溝墓23・後期住居跡３軒、平安時代住居跡19軒・掘立柱建物跡６棟、性格不明土坑若干	佐倉市飯郷作遺跡

3．遺跡発見の契機と調査成果

遺跡発見の契機は、昭和44年10月の自衛隊による井野小学校（当時、仮称北志津小学校）の敷地整地工事中に多数の土器や貝塚が発見されたことによる。遺物発見の通報を受けた市教育委員会は、現地踏査を行った後、昭和48年の体育館の建設に伴う調査まで3次にわたる調査を慶応義塾大学考古学・民族学研究室に依頼して記録保存の措置が講じられた。

その後、土地区画整理事業に先立つ確認調査によって遺跡の重要性が認識されるようになると、保存を前提とした遺跡範囲及び遺跡内容確認のための調査が継続して実施された（参考資料9）。

調査成果については、下記のとおりである（第2図）。

（1）盛土遺構について

一部は小学校建設や宅地造成により失われているが、これまでの調査により「中央窪地」と呼ばれる窪地地形を囲むように南北約160m、東西120mほどの楕円形に展開していたものと推測される。

このほか、環状に巡る盛土（マウンド）の内側に付随する盛土と中央窪地に独立する盛土の2基の小規模な盛土が存在する。各盛土の規模・形状は一様ではなく、現存するもっとも遺存状態の良好な盛土は、基底部最大幅約40m、長さ約85m、現地表面での中央窪地との最大比高差が約2mある。形成時期は、後期後半（安行式）以降と推測されている。

（2）埋め立て造成について

盛土遺構とともに当時の大規模な土地改変を示すものとして、東側斜面部で谷を埋め立てた痕跡が確認された。これは、環状盛土の形成過程において、その一部にかかる斜面の谷部を厚さ2m以上にも埋め立てたものである。埋め立ての最上層には、複数枚に分層できる土層（ローム質の黄褐色土）が最大1.2mを超す厚さで堆積している。本土層中からは、後期中葉～晩期中葉の土器が大量に出土していることから、廃棄場でもあったと考えられる。

本土層の由来は、中央窪地の地山と推測されており、晩期の長期間にわたって人為的に堆積したものと考えられる。

（3）集落について

縄文時代後期前葉（堀之内式期）から晩期前葉までの住居跡、土坑、墓坑、道、ピット群が存在するほか、盛土中に小規模な貝塚や土器集中地点（土器塚）が分布している。これらの各施設は、史跡の南側と西側の学校敷地内で確認された道状遺構を意識し、かつ窪地地形を囲むように展開していると考えられる。

住居跡の中には、後期中葉（加曽利B式期）の推定直径10mを超す大形建物跡が存在し、床面から炭化した竹製の敷物が、主柱穴から炭化した柱材がそれぞれ検出された。盛土の外側裾部（学校敷地内の史跡範囲）で検出された晩期前葉（安行3a～3b式期）の住居跡は建て替えが認められるが、ローム質の黄褐色土で被覆されており、盛土の形成が晩期前葉以降にもおこなわれたことを示す。

道は遺跡の南北に入り込む谷と集落とを結ぶような位置に存在しており、集落を構成する諸施設を空間的に規制する機能を有していたようである。

たとえば、道を挟んで住居跡やピット群が分布する区域と墓坑や貯蔵穴などの土坑群が分布する区域とが識別できるほか、盛土を含め、道と重複する遺構がないことからもうかがえる。

このように、遺構の分布状況から集落のおおよその範囲が把握されたわけであるが、同一台地上の西側、及び小支谷を挟んだ東側台地上には同時期の遺構は確認されていない。

第2図　井野長割遺跡全体図

（4）出土遺物について

盛土中の貝塚は、後期末葉から一部は晩期初頭に形成されたものと考えられるが、印旛沼周辺域の同時期の貝塚と同様に、汽水産のヤマトシジミを主体にハマグリ・オキシジミ・オキアサリ・ムラサキガイなどの鹹水産貝類を少量含んでいる。また、シカ・イノシシをはじめとする獣類のほか、ノウサギ、ネズミ類などの小動物、キジ・カモ類などの鳥類、ウナギ・ボラ・クロダイ・サヨリ・スズキ・ヒラメなどの魚類の骨も多く検出されている。その他、貝製・骨角製利器や装身具類も出土している。

盛土や各遺構からは、多量の土器や石器のほか、土偶や土版（人面付きを含む）、石棒、石剣、有孔球状土製品などの特殊遺物、土製耳飾や石製玉類などの各種装身具など、多種多様な遺物が出土している。

大型建物跡からは、「異形台付土器」と呼ばれる特異なかたちの土器が２点出土しており、その呼称が本例ではじめて用いられたことは土器研究史上著名である。その他の土器のなかには、亀ヶ岡土器様式（大洞式）に代表されるように、東北地方との交流を示すものも見受けられる。また、意識的に底部を打ち欠いた土器を用いて入れ子状に埋設された土器（後期後葉、曽谷式）や内面が赤彩された土器（後期中葉、加曽利Ｂ式）などは、埋葬にかかわる遺物として注目される。